

JSPS Project アウトバウンド海外施設訪問(インドネシア)

日時： 平成 28 年 12 月 12 日 (月) ～平成 28 年 12 月 16 日 (金)

場所： インドネシア、ジャカルタ (インドネシア大学シプトマンガンカサモ病院)



(右) 内視鏡センター入口にてスタッフの皆さんと (右) 病院入口前にてダダン教授、アリ教授と

5 日間にわたりインドネシア首都ジャカルタにある拠点病院(インドネシア大学シプトマンガンカサモ病院)にて医療交流事業を行った。内視鏡スタッフとして内科統括部長ダダン先生、消化器病センター長のアリ先生、内視鏡センター長のムルダニ先生、内視鏡センターのスタッフとして当院や日本の留学経験を有するカカ先生、ファウジ先生、アマンダ先生など合計 8 人のスタッフの先生や消化器内科を志す若きレジデント先生と交流することが可能であった。内視鏡室は RSCSM という日本とインドネシアの通産省交流事業として設備投資がなされており日本と変わらない最新機器を有し、通常 1 日多くて 30 件ぐらいの advanced endoscopy を中心に行う病院であった。また麻酔科医が常勤しており通常から治療内視鏡まで麻酔管理がなされ、内視鏡医は手技に集中できる環境と安全管理という点で非常に整備されている印象だった。総人口が多いが、シプト病院の患者さん待ちはそれほど多くなく、1 日あたりの内視鏡検査数は 30-40 程度と比較的小規模という印象を受けた。



(左) 手技を始める前の Dr ムルダニと筆者、小副川医師 (右) 最終日内視鏡室スタッフとの昼食会

「消化器内視鏡 実技指導」

初日は内視鏡治療部センターでお互いに自己紹介を行った。麻生の方より消化管粘膜下腫瘍についての診断、治療についての講義を2日目、3日目、Dr 小副川より膵嚢胞性病変の診断に関する講義4日目に行い、多数のスタッフが出席して、質問や充実した議論が行われた。また今後の医療交流の在り方や来年のインドネシアテレメディシンシンポジウムの開催の日程や方針について話しあった。我々の訪問に合わせてかなりのバリエーションの症例が用意されており、1日目5例、2日目3例、3日目4例、4日目4例の ERCP, EUS 検査を中心に実技指導を行った。総胆管結石は症例の中で最多であったが、本邦では経験することが少ないような治療難渋症例が多く大変興味深かった。また総胆管結石と診断されながら実際には胆道悪性腫瘍が多く術前診断が不十分である印象が否めなかった。これは本邦と異なり放射線画像診断の未熟さや MRI の普及率の低さが関与しているものと推察された。このような背景からインドネシアでは ERCP、EUS 関連の診断や治療のニーズが相対的に高いものになる現状を把握することが可能であった。連日夕方まで休みなく技術指導が行われた。

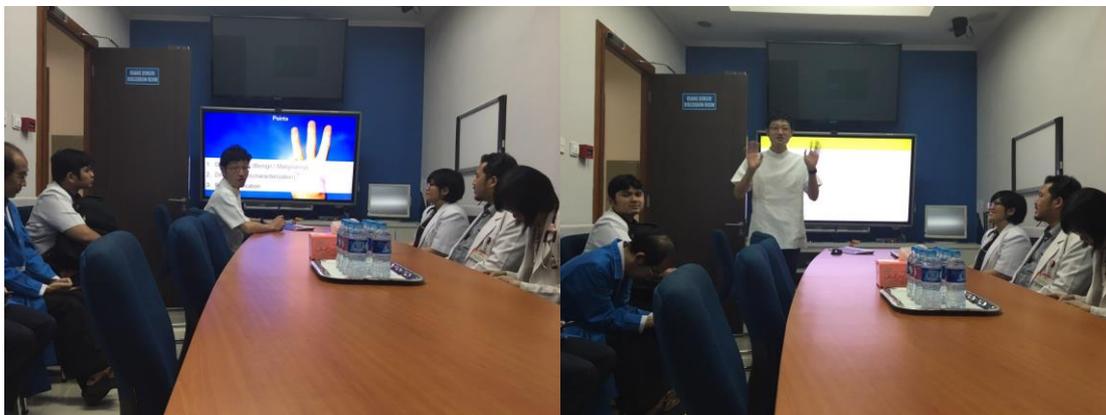


(左) Dr ハサンへの実技指導の様子

(右) 症例にディスカッションする Dr カカと筆者

シプトマンガカサモ病院はインドネシア全体の中心的な教育施設であり、各地から消化器内科を志す若きレジデントが集結していた。今後インドネシア各地で手探り状態されていた、ばらばらな内視鏡の診断や治療手技の統一化プログラムが始動したばかりであった。ダダン教授は EUS を今後 5 年でインドネシア中に 50 台は普及させるという意欲を示された。一方で最新の機器をそろえても、自分たちにはそれを教えてくれる指導者がいないということの問題点にあげられていた。学会主導のワークショップやライブデモンストレーションを開催するなど意欲的取り組んでいるが、インドネシアの内視鏡教育はまだ始まったばかりである。このように今回の訪問は、現地の医療水準のみならず、内視鏡医教育の現状を知る貴重な機会となった。また今後の日本との遠隔医療の更なる発展に向けた興味深い現状のニーズの把握が可能であった。また継続的な医療交流によりインドネシアの中心施設であるチプト病院への今回のような介入はテレメディシンの発展とともにインドネシア全

土の内視鏡診断や治療レベルの向上に寄与する可能性が高く、非常に高い教育効果の波及ポテンシャルを再確認した。



(左) 講義中の様子

(右) 質疑応答の様子

「まとめ」

近年すさまじい発展をとげるインドネシアの現地医療を肌で感じる事が可能であった。現場へ出向くことで、日本独自の丁寧な診断や治療技術の習得課程における指導のノウハウを、インドネシアの人達が非常に必要としていることを実感することができた。

人口を考えると、インドネシアは今後中国やインドに次ぐハイボリュームな医療を必要とするポテンシャルを有している。イスラム教徒が 90%以上という背景で、滞在中にイスラム教の慣習に日常的に触れることができ、宗教的背景を理解するファーストコンタクトとしても非常に貴重な体験をすることが可能であった。

最後に清水先生がこれまで招聘された先生方(ゲスト側)からの素晴らしい準備と歓待に感動しました。参加させて頂きありがとうございます。

文責 国際医療部 麻生